

# 岐阜工業高等専門学校紀要

第 56 号

## 目 次

### 研 究 報 告

在家仏壇の誕生

長浜大工・藤岡甚兵衛重光作の椀本家仏壇について ..... 水野耕嗣 1

教員研究活動の概要 ..... 15

## 在家仏壇の誕生

# 長浜大工・藤岡甚兵衛重光作の椀本家仏壇について

水野 耕嗣

## The birth of a family Buddhist altar About the Sugimoto's family Buddhist altar of Nagahama carpenter, Jinbei Shigemitsu Fujioka

Kohji Mizuno

### Synopsis

This paper is an article on the birth of the Buddha at home that appeared in the early modern period. In particular, I searched for the remains of Buddhist altar made by some carpenters, and found that the first work was a Buddhist altar of the Sugimoto family made by Jinbei Fujioka, a carpenter in Nagahama, Ohmi Province

### はじめに

従来の仏壇の発生についての研究は数多ある<sup>註1</sup>が、仏壇の作り手側から見た仏壇史は未だ確立してはいない。肝心の仏壇の歴史を書いた本は僅かしか見ない<sup>註2</sup>。これは、仏壇業者は商売が肝要で、作り手のことには関心が少ないからであろうか。また仏壇そのものの研究はモノがものだけに、中々拝見までには躊躇<sup>ためらい</sup>があり、また所有者側も他者にとくに見せる物ではないからであろう。

全国には仏壇を製造する地域が数多<sup>あまた</sup>あるが、それぞれ自分の地域で作る特長は誇張するが、その発生についてはこれまた関心が少ない<sup>註3</sup>。

とくに日本は地震・洪水などの天災に加え、火災や戦災で、古い仏壇が失われたことで、仏壇自体の遺構が少なくなっていることに加え、調査の困難性が在家仏壇史の無い事由であろう。

## 1 在家仏壇への胎動

### 1.1 仏壇と仏壇

現在は「仏壇」と土偏<sup>つち</sup>で書かれるが、大本の古代では寺院金堂の内部は大陸式に土間であるので、仏像を安置する壇は石か磚、また漆喰などで固めた土壇といっても差し支えなく、将に土偏の壇で間違いない。しかし古代末より堂内が縁板張りになると、土壇も木製の須弥壇形式になって今日に至っている。

また、江戸中期に成立した仏壇は、当時は木「キ」偏に、作りは直「セン」で「仏壇」と書いていたらしい<sup>註4</sup>。

在家の仏壇は全く土での壇とは関係がないので、木偏の仏壇が本来は正しいのではなかろうか。京都の仏壇街では稀に「仏壇」を掲げる店もあるらしい。

### 1.2 在家仏壇

さていきなり「在家仏壇」と称したが、これは、本来の寺院本堂に置く仏壇や半僧半俗の毛坊主の宅に仏像を安置した仏壇とは区別し、明確に「一般庶民の仏壇」をいうこととする。「在家」の語彙は『日葡辞書』にもあり「身分の低い庶民の家」とあるので、今日の仏壇の展開に相応するものといえる。

従来、今日言う「在家仏壇」の初まりを、天智天皇の詔<sup>みことり</sup>で「国々で、家ごとに仏舎をつくり、仏像と經典を置いて、礼拝供養せよ」<sup>註5</sup>といわれたのを引用し、仏壇業者の宣伝誌等にはそれを記して、古代より仏壇が普及していたようなことを宣伝していたが、詔の「家」が今日の庶民の家屋と違い、「役所」であることを示された宗教民俗学者の五來重説で破綻している<sup>註6</sup>。

また、仏壇の起源には、その祖型は二種が唱えられた。第一は持仏堂に求める説と、第二はお盆に先祖の霊や新仏を迎えて祀る臨時の盆棚が常設化されたものとする説である。前者は持仏堂自体が寺院化するのが多く、とても持仏堂を縮小化しても在家仏壇の淵源には成り難いのでないか、また後者は常設化した仏壇があるのなら、臨時の盆棚が毎年作られるのは疑問である。

しかしいずれも今日の家庭に置かれた仏壇（在家仏壇）

の建造について「人」の面からの発想・追究が欠けているのではないかと思わざるを得ない。

### 1.3 在家仏壇の先駆け

そもそも在家仏壇の先駆けは、長野善光寺の前身たる本田善光の居宅に、難波江で拾い上げた釈迦三尊像を納め運んだ「背負いの厨子」がその先駆けというべきではなかろうか。

本田善光の信濃国伊那郡麻績の里（現・元善光寺付近）の住まいの中央部の臼をひっくり返したところへ安置したもの、西庇の間に移動してまった話が、絵解き『善光寺如来絵伝』<sup>註7</sup>に描かれている。移動のための背負い部分は後に長野善光寺の宮殿に納まった時も、災害時には背負って逃げるために背負い子が付いていた可能性は高い。本田善光は家人であったことで、高級武人でもなく、庶民に区分しても間違いではなかろう。

古代では、庶民が仏教を理解し仏像を求め、それを自分の家に安置するなど当時の家屋の狭小さや、堅穴式住居さえ存在した地方での住居事情から、在家仏壇など存在したとは考えられない。一般庶民の家屋、即ち「民家」（町家・農家・漁家・山家など）では“千年家とか大同屋敷”の語彙が残っている。千年も経た家とか、大同年間（西暦816～819年）に建てた家の意味であるが、文字通りの家屋は全く現存していない。現存最古の遺構は、箱木千年家（農家・14世紀室町後期・兵庫県神戸市）であるが、住居内には復元で考慮しても在家仏壇は存在しなかった<sup>註8</sup>。

### 1.4 在家仏壇の特異性

さらに仏壇は、和蠟燭や線香の油煙や経年の劣化で、ある程度の歳月を経るとお洗濯（煤出し）と称して、全面解体し、傷んだものは取替え、また付加や改変など、まるで建造物の解体修理の如きものでもある。

さて、仏壇を制作するのはどのようになされているのか、現状からいえば、多様な職種に細分化され、それぞれ組立行程に従って製造されるという。日本の伝統的工芸品に認定されている彦根仏壇を例にとると、木地師・宮殿師・彫刻師・鍍金具師・漆塗師・金箔師・蒔絵師・組立師の8部門での共同作業となっている<sup>註9</sup>。こうした体制は仏壇発祥時から成り立っていたのでなく、江戸後期また明治になって次第に仏壇の需要が増えたことによる生産増強の事由に基づくものである。

### 1.5 在家仏壇の主要産地

在家仏壇の最古の遺構を探すために、その視点の次の3点を考慮する。

① 時間 17世紀後半から18世紀初頭元禄期まで

② 地域 仏壇生産地と宗派

③ 人間 作り得る人物像、即ち大工でかつ彫刻もできる人  
先ず第①の時間、即ち年代だが、民家の仏壇調査から、中世末の千年家での「無仏壇」が、江戸初期の十七世紀前半には大工の作る家屋での「床の間型の仏壇」、さらにその「床の間に厨子を置く仏壇」などに移行するものの、未だ「箱型の在家仏壇」は明瞭には確認できない。

大坂陣が終わり、元和偃武で平和が二世代も続いた17世紀後半は、日本国中で生産性が上昇、その象徴ともいえる一例が「畳」の商品化・流通化である。また住宅事情も18世紀初頭からは古民家の文化財指定（建造物）でも急増することで庶民の住居の質の向上を知ることが出来るのである。

そこで仏壇の発生を17世紀後半とされる『住まいの人類学』の大河説を流用したい。

なお、年代の下限は遺構が確認できなくても各地で仏壇屋が成り立った元禄年間としたい。

次に第②の地域からの問題である。時間即ち仏壇の発祥

表1 元禄～享保期の仏壇産地の在家仏壇制作略年表

和暦	西暦	産地名	仏壇製作内容	典拠
元禄2年	1689	大坂仏壇	元禄2年創業の仏壇屋あり。	現代の仏壇・仏具工芸 p131
元禄2年	1689	飯山仏壇	元禄2年に甲府から寺瀬重高なるものが来て、素地仏壇を手掛けた。	現代の仏壇・仏具工芸 p63
元禄8年	1696	名古屋仏壇	元禄8年、高木仁右衛門が仏壇専門店「ひろ屋」を創業したことに始まるという。	名古屋仏壇 p13
江戸中期		彦根仏壇	仏壇の発祥は江戸中期以降とみてよく…。	現代の仏壇・仏具工芸 p113
元禄16年	1703	山形仏壇	元禄16年制作の現在山形にある仏壇は、塗仏壇で現存。当時で120両もしたと言われている。	現代の仏壇・仏具工芸 p41
元禄17年	1704	三河仏壇	元禄17年仏壇師庄八の記載あり。なお、現存最古のウネリ長押造の仏壇遺構は寛政3年制作（墨書）の都築満家（愛知県安城市）のものといわれている。	現代の仏壇・仏具工芸 p102。仏壇墨書。
元禄末期 ～ 享保初期	1704 ～ 1716	白根仏壇	白根市日の出町の沢田正三氏宅の仏壇は、御本尊裏書の法名と沢田家の過去帳より、元禄末期から享保初期（1700～1720）頃のものとして推定されている。	現代の仏壇・仏具工芸 p56
享保元年	1716	広島仏壇	京都で仏壇仏具の技術を学んだ僧職高が広島に帰ってきて、仏壇をつくらせた。	現代の仏壇・仏具工芸 p137
享保2、3年	1717	京都仏壇	本證寺（愛知県安城市）のお内仏で、享保2、3年頃制作されたものと伝承。	本證寺前住職談。
延享2年	1745	江戸仏壇	江戸では延享2年頃から仏壇が作られていたとの事実がある。伊能忠敬家仏壇は宝暦年製と伝える。	現代の仏壇・仏具工芸 p72



で京都は元々最古であるが、これは全国の寺院への仏壇、即ち須弥壇を作ることで、在家仏壇を主要とするものではない。

とはいえ、全国各地へも要望で在家仏壇を製造することはあったであろう。例えばその一例として飛騨高山の豪商・日下部家では京都に仏壇を発注し、部材を輸送し現地で組立て、明和8年（1771）に出来たという。なおその値段は300両であったという<sup>註10</sup>。これは在家仏壇が上層商人の江戸中期での話であるが、京都での調達是非常に高価であったことが判る。

なお、本證寺（愛知県安城市）の御内仏は正面の欄間が端正な箴欄間であり、内部は宮殿形式ではなく天蓋が付くもので、元文2、3年（1737）頃に京都で調達したという古さの御内仏であり<sup>註11</sup>、御内仏壇史の参考になる。

恐らく各地ではこうした在家仏壇の普及には全力をあげ、今日では彦根、名古屋、岡崎、大坂など元禄期に仏壇業が成立し仏壇産地として知名度を上げていくのである。

なお、年次的には中世末期の能登七尾国守の畠山氏が京都から多彩な職人を連れてきて細工所を構えたから仏壇も早くから生産したともいわれるが、これは国守が自ら使う什器や将軍家など献上品を作るためのもので、仏壇を作る



写3 御内仏 内扉の障子



写4 御内仏 外扉（雨戸）



写1 本證寺 御内仏 内観



写2 御内仏 見上げ

ための工房ではない。じじつ七尾仏壇で最古的遺構は江戸後期（文化・文政）が上限である<sup>註12</sup>。金沢仏壇も著名ではあるが、金沢藩でも細工所が設けられたということで仏壇製造と結び付を強調するむきもあるが、これも藩主前田候一門の什器や引出物・献上品の制作が目的であって、城下の庶民のためのものではない。金沢での在家仏壇の古いものに前田藩家老横山家仏壇（1700年頃）があったよう<sup>註13</sup>。だがこれが細工所で出来たものかは確かめられてはいない。また金沢では宮崎家仏壇が元禄年間製の京都仏壇があったらしい。先の横山家も京都製の可能性が強い。よって、七尾や金沢は後には仏壇産地をして栄えるが、これは江戸後期以降のことであって、在家仏壇の誕生地からは外さざるを得ない。

さらに越後新潟各地、信州飯山、安芸広島なども真宗仏壇の産地として著名だが、仏壇生産開始時期が元禄期より少し遅れるので外す。

なお、地理的に遠い九州南端の川内仏壇も仏壇産地として著名であるが、隠れキリシタンと同様の藩主島津家の浄土真宗弾圧のため、隠れ念仏の仏壇として箆笥に仕込んだような特異な仏壇がある<sup>註14</sup>が、一般的な箱仏壇とは違うので省かざるを得ない。また蝦夷地（北海道）での仏壇産業は明治以降であるので、在家仏壇発祥からは程遠い。徳島も大量生産で大坂仏壇を補完したもので仏壇発祥からはこれも省かざるを得ない。

これらを纏めて九州・四国・北海道を除くと本州で遺構を探すこととなる。



本州でも、阿弥陀信仰の強い浄土真宗は親鸞の佐渡流罪で、刑が解けた後の阿弥陀信仰の北陸筋・関東での広宣流布と京都帰還途中での三河の寺院の浄土真宗化、さらに蓮如が吉崎御坊を中心に積極的に北陸筋に布教をしたので、いわば京都から北陸筋、加えて彦根・長浜から岐阜・名古屋・岡崎へのY字型ベルト地帯が真宗王国として信仰の篤い地で仏壇産地として名を馳せていくのである。

この阿弥陀如来を信仰する浄土真宗は階層が一般庶民層であり、六字名号を掲げ、講を通じて連帯が強かったともいえる。この阿弥陀信仰の篤さが間もなく在家仏壇を生み出すのである。

最後に③の人の問題である。従来の仏壇誕生で大きく欠けているのは誰が在家仏壇を作ったかを問題にした考究は管見しないといってもよからう。

所詮「ものは人が作る」のである。では在家仏壇を作り得る人とは誰か？といえ、木を扱う「大工」が第一に挙げられる。

古代から建築（宮殿・役所・寺院・神社など）に限らず土木（橋・水道など）を差配したのは「大工（おおきたくみ）」であった。

近世には新たに戦国大名に付属し、戦陣にも随行、大将の陣営を作るのが仕事でもあった。平時でも城郭や屋敷の建設とその維持に従ったのは言うまでもない。尾張熱田社付の大工でありながら信長堀の仕事で認められ、後破天荒な城ともいえる安土城天主ができたのは信長の描く天主形態はもちろん、内部の部屋割りなど意向をまとめ、構造的な工夫を重ね、信長が求める天主を実現したことで「日本

総天守の棟梁」と称されたのである。要するに、「大工は今までにないものでも全体像を描き出し、それを何とか組上げてまとめる仕事をする人」なのである。壁塗りの左官がお城を計画することはできないと同様、塗師が仏壇を発想することは難しいといってもよからう。

表2の大工・木澤家作の仏壇は、年次的に元禄から120年も経て建ており、各地に仏壇が増えて何処かで仏壇を見ていると思われるので制作を依頼されても容易に出来たであろう<sup>註15</sup>。その次の諏訪大工・立川家も元禄からは60年近くも後であることと、立川自体が各地へ仕事で出掛けているので、仏壇を目にする機会が多くあったと思われる、しかも彫刻への志向意欲が高く、仏壇制作はさほど難しいものではない<sup>註16</sup>。

とはいえ大工技術のみでは仏壇を計画することも難しい。仏壇の装飾での木彫が必要なので、器用な大工ならそれは出来る。例えば真田家仏壇（岐阜県下呂市）は享保11年（1726）に飛騨高山の高名な大工松田太右衛門が作ったものである<sup>註17</sup>。

仏壇は箱型で前に扉が付き、内部は二段の板敷があるのみで、宮殿造では全くない。宮殿に代わるものとして両端の柱間に斗拱（ひょうぐう）を据え唐破風板状の変形の水引長押を設け、上の桁の間に彩色の「雲中天女」の彫刻を設え、極楽浄土を表現し、まさに初期的仏壇の様相を呈している。

ただ松田太右衛門が以前に在家仏壇を見ていたかという少し首を傾げざるを得ない。平面的に□型ではなく凸型であるのは太右衛門の工夫の末なのか、知見不足によるものなのか判断に迷う。

表2 大工の作った在家仏壇

和暦	西暦	制作の大工名	仏壇所有者名	所在地	備考
嘉永4年	1851	近江今在家大工 木澤甚六	谷長右衛門家仏壇	滋賀県日野町	代価40両
天保6年	1835	信濃諏訪大工 立川和四郎富昌	旧山田恵津子家仏壇	長野県諏訪市	現・定松院内仏壇 (令和元年山田家より寄贈)
安永3年頃	1774	信濃諏訪大工 立川和四郎富棟	竹村家仏壇	長野県茅野市	
享保11年	1726	飛騨高山大工 松田太右衛門以治	旧真田忠勝家仏壇	岐阜県高山市	現・高山市郷土館蔵
貞享2年	1685	近江長浜大工 藤岡甚兵衛重光	旧北川家仏壇	滋賀県長浜市	現・長浜市曳山博物館蔵 (平成28年北川家より寄贈)
延宝8年	1680	近江長浜大工 藤岡甚兵衛藤原重光	梶本晃家仏壇	滋賀県長浜市	



写5 真田家仏壇 正面外観



写6 右側面と背面



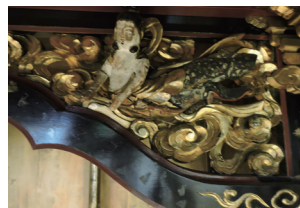
写7 下段と前板



写8 中央上部の装飾彫刻



写9 内部柱頂部の木鼻と斗拱



写10 彫刻（雲中天女）



写11 螺鈿塗紛いの漆塗



写12 引違板戸表面（上部）と裏墨書（下部）

### 1.6 梶本家仏壇のこと

近代で初めて藤岡家の「和泉壇」に言及したのは内田秀雄が「彦根仏壇について」（大阪学芸大学紀要 13号 1964年）を著し、

（前略）徳川初期、長浜伊部町に在住した和泉甚兵衛（元和三～宝永三）は彫刻の名人で仏壇にも一新機軸を出し和泉壇といわれ、その子孫代々に藤岡和泉（現在も長浜伊部町住）と称して、今日職を継いでいる。（後略）

と、記してはいるが、具体的な仏壇記述はない。しかも彦根壇を浜壇の拡大の中でとらえているのは、その発祥が彦根壇より早いことを示唆しており、重要な指摘であったが、大学研究紀要が外部で流布することは稀であり、この論考を退職時に出版（1971年）されたものゝ、非売品のため普及は限定的であった。

さて、梶本家仏壇については、今回が初見のものではない。既に筆者は1996年に日本建築学会大会で「長浜大工藤岡家の初期遺構」という小論で梶本家と北川家の仏壇を取り上げていた。学会での反応は鈍かったといえる。その後『長浜市史 第5巻 暮らしと生業』（長浜市 1999年刊）では、藤岡家の作品一覧での仏壇記載、大野一英著『仏壇物語』（探求社 2006年刊）の中の長浜仏壇で取り上げられたものの、いずれも仏壇の概要さえ記されていない。小生の論も、単に藤岡家の初期作品の一つであることと、早期の仏壇遺構であることを紹介した程度で、梶本家仏壇そのものの論考ではなかった。いわば初期性を強調したものであったが、今回はそれが藤岡家制作の最古の仏壇であることをほぼ解明できたのでそれを記すのである。

### 2 梶本家仏壇（長浜市新居）

#### 2.1 現仏壇の構造と様式

仏壇の規模は、左右：156.7cm（5.27尺）、上下：192.0cm（6.34尺）、奥行：99.1cm（3.27尺）である。

外面正面の形状は、上部は欄間（素木の彫刻入）で、中部は二折両開（四段透障子、腰板櫛無垢一枚板）、下部は腰板（格狭間型）三面（板に鍍金具付）である。

内部の構成は、三段型で、上段逆凸形平面、仕上は上・中・下ともに黒漆仕上である。

各壇の蹴上面は、中段中央および両脇がそれぞれ須弥壇形式で、下段は欄間型三面に「鞠唐獅子」の金泥絵仕上である。

さて、須弥壇に載る宮殿の形式は、背面屋根は左右に大棟を流す寄棟屋根形式で、両端部前方に絶破風を出し、左側千鳥破風・中央軒唐破風付き入母屋造、右側も千鳥破風を配する複雑な屋根構成をとる。中央入母屋屋根及び左右屋根の垂木は平行椽の二軒形式。宮殿中央前柱上に三手先組物で入母屋屋根の出桁を支える。中央正面の水引虹梁



が、軒唐破風板状の中央が迫り上がる形状の虹梁を架ける<sup>註18</sup>の虹梁の端部を「唐草文」の持送で支える。軒唐破風下に輪垂木を配す。出桁間の虹梁の上には笈形付大瓶束で出組組物を載せ棟木を支える。虹梁下には彫刻を施した板支輪を置く。左右脇間の柱頂部に出組組物で軒桁を支える。なお柱間には迫り上げ形の虹梁を渡し、出桁間に彫刻を配す。またその虹梁端に持送を付す。

次に装飾面について記す。

まず仏壇の内装仕上は、黒漆、金箔が主体である。

次に彫刻は、前欄間「牡丹」、須弥壇「蓮花」、宮殿正面柱と脇柱間左右共「蓮花」、宮殿正面二本柱上部持送「唐草文」、虹梁上右大瓶束笈形「梅」、同左「竹」、正面台輪上髯股「松」、同両側面髯股「唐草文」、唐破風奥虹梁下板支輪「雲文」、同虹梁上笈形「唐草文」、左右屋根妻飾「雲文」、右虹梁上「枇杷一对」、左虹梁上「牡丹一对」、正面入母屋屋根妻飾は「雲文」である。なお、屋根の懸魚を止める留金具でさね木彫刻を金箔仕上げとしている。

また銕金具は、著しく少なく、外扉の蝶番金具程度しかない<sup>註19</sup>。なお当初の蝶番金具は後のお洗濯時に変更された可能性が高い。

最後に絵画は、僅かに下段奥板三面の蒔絵の「唐獅子の鞠遊び」ていどである。

なお、躯体の仏壇以外の仏具に付いては、上段奥右が「見真大師像の絵と文字」の掛軸、中央が「阿弥陀如来立像」、左が「南無不可思議光如来（文字）」の掛軸である。

また中段は前卓と三具足及び位牌を置く場である。さらに下段は経典、数珠、お鈴の置き場である。



写13 椋木家仏壇 仏壇の障子戸



写14 障子戸を開けたところ



写15 正面中央部の宮殿

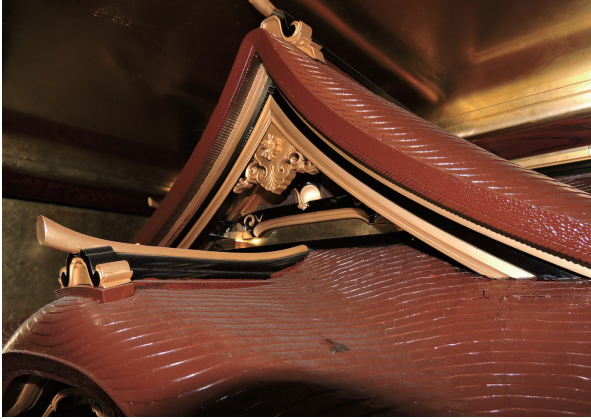


写16 正面下部



写17 宮殿屋根右部





写18 宮殿屋根中央部



写22 水引虹梁と彫刻 枇杷



写19 宮殿屋根左部



写23 虹梁間の彫刻 梅



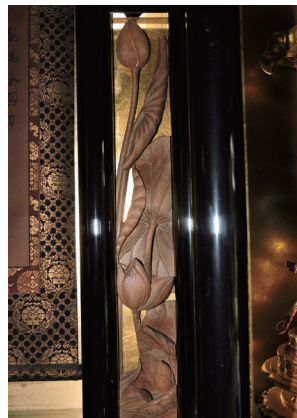
写20 唐破風下部廻り



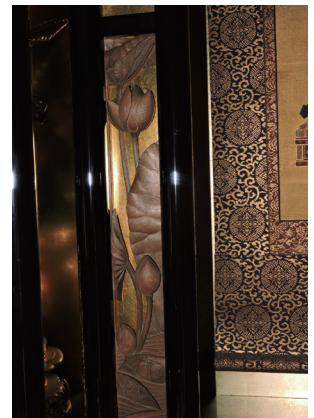
写24 須弥壇の彫刻 蓮花



写21 正面欄間彫刻 牡丹



写25 方立彫刻左 蓮花



写26 方立彫刻右 蓮花



## 2.2 仏壇の制作年次と制作者及び変遷

現在の椀本家仏壇は、伝承では元々は旧・速水の旧家から購入したものである<sup>註19</sup>。椀本家での平成の洗濯時に創立年次等が、仏壇内部の宮殿屋根裏の墨書が見つかり上記の如く、この仏壇の制作年次が延宝8年（1680）9月吉日であり、制作者は長浜伊部町に住む大工の藤岡甚兵衛藤原重光であることが明確となった。



写27 椀本家仏壇屋根裏墨書

延寶八庚申年  
江州長濱伊部町  
藤岡甚兵衛  
藤原重光作之  
大工  
晩秋吉日

図1 同上 翻刻

墨書が書かれた位置が宮殿の屋根板裏面であり、しかも宮殿は後世の補充ではなく、仏壇制作当初から存在すると判断される。たとえ宮殿部分の塗などの改変は有ったとしても、基本的に宮殿屋根本体の改造は無いとみてよいので、この墨書は後世に追い書きされたものではなく、当初に書かれたものであることが判る。

さらに、この墨書の記法に注目したい。それは、この年次が左右に振り分けて記されていること、また、中央最上部に「大工」とあり、その下に「居住地」と「姓名」が書かれ、その姓名は「苗字・通名・姓・本名」といわばフルネームで書かれているのである。この記法は、建造物の棟札の記法と同様であることである。もちろん堂宮建造物の場合の表面の「梵字」「建造物名」「旦那名」「当該住職名（神官名）」はここでは無い。藤岡甚兵衛のこのような記述には、たんに忘備のために記したわけではなく、恐らく建造物と同等に精魂込めて仕上げた「上棟」の意識が込められていると見るべきであろう。甚兵衛は試作や思索を重ね、数ヶ月、いや幾数年をかけて作り上げたこの仏壇は後に普及する仏壇の将に先駆けとなったものと理解したい。

なお、椀本家の購入時期は明確ではないが、修理時の補

記として紙に書かれ貼り付けられた墨書の次記がある。

「明治十一<sup>戊寅</sup>一月出来／浅井郡新居村／椀本太原様持用」  
「近江坂田郡小一條村／木地直シ人 尾崎平助／近江國坂田郡高橋村／塗師 森喜平」

なお、所有者は椀本家では

…太原 → 元之進 → 悦三 → 昌嗣 → 晃

の順で、これにより椀本家所有の仏壇は、明治11年（1879）1月に洗濯修理が完了し、小一條村の木地師・尾崎平助と高橋村の塗師・森喜平が関与していることから、仏壇の外側躯体や宮殿に関わる部位の変更や補充、さらに塗直しを含めた漆仕上の追加があったとみるべきであろう。

この時の修理ではどうも以前からあった正面上部の欄間に細工がなされ、その彫刻部分を奥に揚げられるように改造されたのではないかと推測する。というのは、仏壇奥の須弥壇上の宮殿が、仏壇正面で読経する僧侶以外には見難く、恐らく法要時など親戚筋の参加者が、脇や遠方からも複雑で見事な屋根形態が見られるようにしたのではないかと私考するものである。

なお、椀本家仏壇には別に一組の飾り扉が存在するのは将に木地師・塗師たちの手による改造・追加による法要用扉の制作と、全体の漆塗を含めた洗濯でもあったのであろう。

よって、椀本家が購入したのは、江戸末明治初期らしく、出世仏壇として評価し、買い求めたものといえよう。

恐らく、その購入後に所謂仏壇のお洗濯が計画され、明治11年に修理が終わったのである。さらに近年（平成25年＝2004）にも約百年ぶりに「井上塗師屋」<sup>註20</sup>で洗濯がなされ、今日に至るといふ。

## 2.3 当仏壇の意義

椀本家仏壇は、近江長浜の大工藤岡甚兵衛氏により制作されたことが明白となり、いわゆる浜仏壇とも違う、いわゆる「和泉壇」<sup>註21</sup>の先駆的作品である。

この仏壇で目立つ特徴は「宮殿」の存在である。しかも複雑な屋根形式で、後に八つ棟とも称される形式である。藤岡甚兵衛は日頃唱和する浄土真宗の『阿弥陀経』の極楽を思い描き、『浄土変相図』を建築化したと言われる宇治の平等院鳳凰堂を念頭に、中央に阿弥陀堂、左右の翼廊を一体化し、かつ下部には須弥壇型で須弥山の世界を醸し出し、まさに極楽浄土をこの小さな宮殿に仮託したのではないかと考えられる。

加えてその木彫刻の主題は正面上部に「牡丹」、内部須弥壇に「蓮花」、「枇杷」、「松・竹・梅」それに「雲文」等を配するが、牡丹は「富貴」、枇杷は「子孫繁栄」、松竹梅「長寿繁栄」、蓮花や雲文は「極楽浄土」の象徴であり、仏壇に込める庶民の願いが具現化されていると言える。

このように木彫刻は多いが、金具が極端に少ないので、まさに大工が作る在家仏壇の初期的様相を示していると考えられる。というのは長浜で金具が隆盛するのは江戸後期の文化文政以降とも言われるので<sup>註22</sup>、ほぼ同じころ出来た旧北川家仏壇（貞享2年）の多彩で多量の金具装着は後の洗濯時での補充改変<sup>註23</sup>と考えられる。

なお、宮殿正面中央に架ける虹梁の形態が一般的な虹梁ではなく、端から中央に向かって迫り上げるもので、花頭窓型とも、唐破風板とも類似する独特な形態である。

なお、先記した仏壇への記法は、椀本家仏壇に次ぐ第2作の旧北川家仏壇では、「願主名」が入っていることが異なる。記法も制作年次を左右に振り分ける棟札的ではなく、淡々と全容を記すもので、制作者を明らかにし、責任を負うことを明確にしていることが記法の変化といえる。恐らく洗濯のことも既に織り込み済で記載しているかの如くである。

また記載の場所は、椀本家は仏壇屋根背面であったが、以後はそこに見られず、抽斗<sup>ひきだし</sup>の底面や背面に記すのが定法をなっていくようである。

以上椀本家仏壇は、藤岡家の手掛けた今日いう和泉壇<sup>註24</sup>期の作品ではなく、全体に在家仏壇の初期的様相を残す現存最古の遺構として貴重な仏壇といえる。

なお、冒頭の椀本家仏壇は当初速水の旧家が所有しており、後に椀本家がいり受たわけだが、速水の旧家が誰かは未詳である。しかもこの旧家の人が、制作を大工藤岡に仏壇の構想を話して依頼したのか、それとも藤岡自身が自分のために制作したのかが大きな謎である。筆者は墨書の記法から後者の説を取りたい。

そもそも藤岡家の祖は、藤岡甚兵衛といい、最後の藤岡家の和泉氏談によれば“藤岡家はもともと大工で、建物の仕事が無いときは棺桶まで作っていた”という。

しかし、この大工説には、多少疑問がある。近江には中世末より近江八幡の高木作右衛門のほか、野洲郡の谷川若狭、東部北部には宮部太兵衛、浅井郡の西島但馬など名門的な大工家が散在するが、藤岡甚兵衛が誰の下で修業したのか記録・伝承が皆目無く不明である。そこで大工に入門したことは無いのでは？との素朴な疑問が出る。

ところが「達書」（藤岡滋子家文書）によれば

彦根御領分郷町諸職人之儀は、御國役相勤候御蔭ヲ以、御領分ニ住居仕、妻子を安穩ニ養渡世致候事、全御上御高恩ニ候得は、一統難有可奉存事ニ候、殊ニ大工職之儀は大坂御陣之砌久昌院様御供ニ被為召連、戰場ノ勤御称美被下置、既ニ京都惣棟梁中居主水方へ被仰達、彦根御城附ニ被仰付候ニ付、京都支配相まぬかれ、其外職人迎も右ニ准し御國役相勤家筋之者共は諸役御免ヲも蒙り罷居候事ニ候得は、

猶更厚相心得、職人一統御用向被仰付候ハ、難有仕合ニ奉存、（中略）

文化十二亥年

四月

奉行

とあり、大坂陣への参加が明確で、恐らく大工として本陣の設営や解体運搬で力を尽くしたに違いない。中井を中居と書くなどは写書であることを示すが、藤岡家が大工であった証をこの達書で子孫に伝えたかったと理解したい。

ところがその大工不入門とは別に「藤岡は近江の井関家に入門した」という説がある<sup>註25</sup>。

井関家とは、近江の猿楽を始祖にもつ家柄<sup>註26</sup>で、後に能に転じ、能面を制作する生業家<sup>なりわい</sup>となったという。要するに面打師なので、彫物師ともいえる。

井関家の始祖は、能面師三光坊の弟子であったという上総介親信といわれ、以後

次郎左衛門 — 備中掾 — 河内大掾家重と続いたようである。

家重は寛永期に幕府に召され江戸に下り、正保2年に（1645）没する。彼の弟子に大宮大和真盛がいる。従って家重、又はその先代の治郎左衛門が近江にいた頃に藤岡甚兵衛は門下となったのであろうか。

『近江国坂田郡志』では、治郎左衛門について

南郷里村大字七條の人なり、井関氏は京極氏の臣にして、その家數家に分る。此内に於て仮面彫物の名手として、仮面界に近江井関の盛名を博せし一家あり。後世長濱町に有名なる彫刻師藤岡和泉あり。井関治郎左衛門の門人なりという。

とあるので、能面師・治郎左衛門に藤岡甚兵衛が師事したことは有り得ると思われる。

なお、井関家の作品には「イセキ」のカタカナ銘があるという。近江の隣国の越前敦賀の気比大社（敦賀市）にこのイセキ名の面が残されている<sup>註27</sup>。さらに近年仏師が面打ちであった例が報告され<sup>註28</sup>、甚兵衛が面打ちと大工を兼ねてもおかしくはないといえる。

甚兵衛はそうした井関家で彫刻的修業を積んだ可能性は十分ある。それは、藤岡家の現在知られる最も初期の遺構は、建造物とは程遠い規模の長浜八幡神社神輿（延宝4年長浜市）の制作である。この神輿は焼失し、後の元禄年に再建され、現存している。

続く遺構は椀本家仏壇（延宝8年 長浜市）であり、さらに旧北川家仏壇（貞享2年 米原市）が続き、建造物は少し遅れて塩津神社本殿（元禄7年 長浜市）が出現するのである。

これを見ると、当初の神輿や仏壇などはその彫刻が建



造物に比して極端に小規模であることが指摘できる。

要するに、面打ちの小品の彫刻で十分対応できるので、甚兵衛は井関家で修業した可能性は十分あるといえる。

もちろん甚兵衛の意思が大工の建造物を目指すものなら、能面打ちの井関家は江戸初期に近江から居を江戸に移し、徳川家に付いたので、師匠を失った藤岡は、大工家に改めて入門し修業したことは十分考えられる。

しかし、その師匠筋の名は藤岡家には記録類が無く、伝承もない。しかし別に当時の大工のテキストたる『建築雛形』（明暦元年刊）を入手して独自に研鑽し会得したとも考えられる。それは塩津神社の建造物が意外と小振りであることとは、建築術の基本を習得すれば出来ることで、さらに得意の彫刻を本殿につければ出来が良いことは当然であろう。

藤岡家の技法の一つの建築的には本殿正面の柱上部の水引虹梁に変化を与え、唐破風屋根の破風板のごとき形態にしたものがあり、それを仏壇で工夫して取入れ連続と続けられたのである。

また、彫刻も当時は彩色彫刻が定番であったが、ケヤキの素木彫を採用するなど新味を打ち出している。また、仏壇全体にはヒノキ材とケヤキ材とケヤキを薄く貼付けにした物を束つかに用い、仕口にホゾ以外にアリを使い精確で堅牢なものを新機軸として打ち出しているのである。

なお、この仏壇は客の注文で作ったのか、またその客は誰で何時買い取られたのかは当然不明である。恐らく出来上がり後、暫くは売らなかつたかもしれない。この仏壇が完成する頃は隣の彦根城下に伝えられたに違いない。今日のような即時のごときニュースが飛び交う時代とは異なり、関所を介して行く当時の時世とはいえ、一度プロトタイプ（原型）が完成すれば、それを模すことは容易であるので、隣の彦根はもちろん、尾張の名古屋や岡崎には街道を通して伝わった可能性は高い。これにより元禄期に名古屋に仏壇屋が、岡崎に仏壇師が誕生したのも理解できよう。

さらに京都・大坂へも噂が流れ、仏壇業界にも改めて在家仏壇がどういうものかを地方から学び取ったのではなからうか。それが真宗寺院へのお内仏であり、その早期性を先記した本證寺（安城市）のお内仏がそれを示しているのである。

### 3 梶山家以後の藤岡の仏壇制作

梶山家仏壇や旧北川家仏壇がつくられると、長浜では真似て仏壇が作られるようになった。これを浜仏壇という。しかし藤岡家の仏壇は藤岡家の通名の「和泉」を名乗ったのでそれを冠して「和泉壇」と称して区別している。

藤岡家を家系的にみると。当初は藤岡甚兵衛家があり、後の代に甚兵衛と重兵衛の兄弟で二家になり、共に助けあった大工一家であった。しかし甚兵衛家が男子に恵まれなかつたのか絶えたらしく、重兵衛家が藤岡甚兵衛家を受

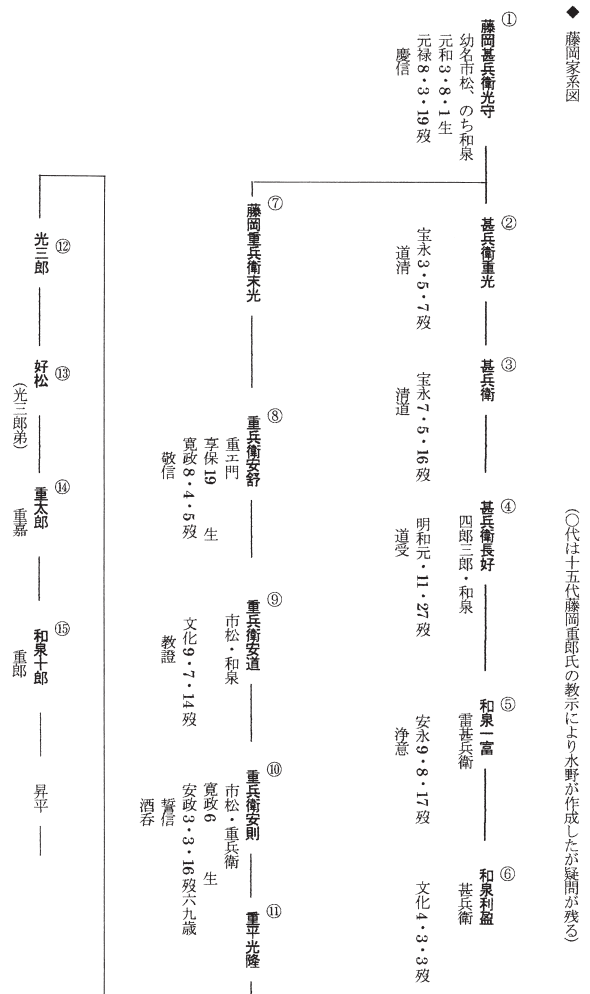


図2 藤岡家系図

け継いでいるようである（図2 藤岡家系図参照）。

藤岡甚兵衛が仏壇を作ったとはいえ、仏壇師などとは唱えなかつた。これは本来の大工で十分であるからで、僅かに「宮殿大工」と墨書したことがあり（西村仁兵衛家仏壇：宝永元年）、他には「細工人」と記したことがある（長谷部家仏壇：明和2年）のは珍しい。

なお、仏壇は、当初の宮殿造（八棟造）以外に中央部を大唐破風屋根で強調した形式も案出したり、全く宮殿を入れないもの（旧下坂家仏壇：元文4年）、宮殿はあるが、木彫と漆塗が主体で簡素なもの（森望家仏壇：安永8年）、彫刻・漆塗・金具・蒔絵など裝飾にバランスが取れたもの（鈴木正文家仏壇：文化5年）、鋳金具に重点を置いたもの（旧富田豊次郎家仏壇：天保2年）など多様な対応を取っていったらしく、全体に素木作りのまゝであったもの（ベルベット社仏壇：大正7年）さえあったことを、特に強調して記しておきたい。

また、和泉壇の総数は200ほど作られたとの説もあるらしいが、全容は不明である。

最後に藤岡家の仏壇・建築・曳山の3分野の諸作品を付記（表3・表4・表5）として掲載する。

## むすびに

以上長浜の大工・藤岡甚兵衛重光が作った現存の椀本家仏壇は、在家仏壇として延宝8年に制作されたもので、その年次の早さと、仏壇の構造・様式、それに仕上げなど、在家仏壇の初源的様相をよく備えており、在家仏壇史上非常に価値の高いものであることが判明したといえる。

## 註

- 1) 柳田国男「毛坊主考」(郷土研究 大正3年3月)が仏壇の発生を扱った最初の論考であろう。
- 2) 『現代の仏壇・仏具工芸』(鎌倉新書 1977年刊)の第一編仏壇の歴史、及び『日本の伝統仏壇集』(松栄出版 1977年刊)の「仏壇の発祥と変遷」がある程度である。なお近年刊のヨルン・ボクホベン著『葬儀と仏壇』(岩田書店 2005年刊)は「浄土真宗と仏壇」の項目はあるが、藤岡作の仏壇には全く触れていない。
- 3) 内田秀雄著『日本人の宗教的風土と郷土観』(大明社 1971年刊)の「二 彦根仏壇の起源」の中で、長浜の藤岡作の「和泉壇」に言及し、藤岡家の仏壇制作の早期性を看取したことは瞠目すべきものであった。
- 4) 五來重著『仏教と民俗』の「仏教と位牌」の項。
- 5) 全編新訳『日本書紀』(角川書店 2020年刊)を掲載。
- 6) 五來重著『日本人の生死観』(角川書店 1994年刊)
- 7) 若麻績侑孝監修『縁起堂淵之坊 善光寺如縁起』所収
- 8) 工藤圭章編『日本の民家 三』(学習研究社 1981年刊)。
- 9) 『日本の伝統仏壇集』p45～49の彦根仏壇の項。
- 10) 日下部民芸館館長・日下部勝氏談
- 11) 本證寺前住職小山正文氏は元文2、3年の年次のあるものを見たがそれは今紛失という。
- 12) 『伝統的工芸品 七尾の仏壇』(七尾仏壇協同組合 2006年刊) p11
- 13) 『現代の仏壇・仏具工芸』p26
- 14) 『新編 真実に生きる人々 薩摩のかくれ念仏』(真宗大谷派鹿見島別院 2006年刊)に隠し仏壇の掲載がある。
- 15) 木澤甚六は江戸時代から近代明治大正期に近江国今在家の大工の家柄で、一門で彫刻にも秀で、近隣の神輿や曳山の制作もしており、遠くでは伊勢桑名の祭車の彫刻も担っているほどである。さらに仏壇の作例も出現している。
- 16) 信濃諏訪の大工で、江戸後期から明治期にかけて四代にわたり活躍した。とくに彫刻にも優れ、代表作として諏訪大社、静岡浅間神社、秋葉神社、善光寺大勧進などの建造物以外に尾張半田亀崎の招聘を受け、山車彫刻にも進出、さらに在家仏壇も時に作っている。二代目の次弟・立川富種は最小の彫刻の根付では世界的に有名。
- 17) 松田太右衛門は江戸中期の高山の著名大工で、本来は社寺建築が主体である。何故仏壇を作ろうとしたのか、真田家の強い要請があったのであろう。彫刻としては正宗寺(高山市丹生川)本堂の欄間や、日枝神社末社富士社がある。
- 18) 藤岡作仏壇に詳しい宮川弘久氏は、この異形の水引虹梁のことを形状から「花頭風虹梁」と呼称「藤岡和泉について」(会員の声)所収している。
- 19) 故椀本悦三氏談
- 20) 平成26年に洗濯を担当した「井上塗師屋」は、長浜で六代続く塗師家で、五代樋口昭裕・六代樋口康彦が担った。今回は木地

に関わる修理は無く、洗濯一本であり、基本的は塗作業であったという。その修理で、先回の洗濯(明治11年)での改変・追加分が明らかになった。

- 21) 長浜で製造された仏壇を「浜壇」というが、とくに藤岡家の関与分は後世「和泉壇」と別称される。なお当初からではなく和泉神社本殿(宝永4年)の建造以後に大工藤岡を別に「和泉」と呼ばれたらしく、和泉を称することになったらしい。正式な「和泉守」を受領した形跡はなく、墨書の銘にも見つからない。恐らく私称の可能性が高い。
- 22) 長浜市の東北部に国友という地域がある。この地は安土時代から江戸時代に「鉄砲」の産地として知られるが、江戸後半期は平和が続き、戦用の鉄砲の需要は落込み、勢い平和産業への転換を図らねばならなくなった。幸い長浜の曳山の銚金具へ目を向け、さらに在家仏壇の誕生により、浜仏壇での需要に応えることできた。
- 23) 金泉堂(長浜市)の辻清氏談
- 24) 『近江坂田郡志』p812
- 25) 『能面の世界』(平凡社 2012年刊)
- 26) 現在は敦賀博物館に寄託中
- 27) 面打ちの大光坊幸賢が仏師として作品を残している事例を田辺三郎助「面打ち・大光坊幸賢と近江井関」(『月刊文化財 平成11年4月号』)に所収。

## 謝辞

本稿は、椀本晃氏及び故ご母堂さまの厚意により、仏壇を間近に拝見でき、仏壇の詳細を把握、諸資料により藤岡仏壇の解明を進めることが出来ました。

また、藤岡家一族(藤岡和泉重太郎・藤岡滋子・藤岡登美子・中野弥生・中野喜久雄)のご配慮により貴重な史料の閲覧をさせて頂きました。

さらに仏壇生産の各地仏壇商工協同組合や各地市町村の教育委員会文化財保護課にもお世話になりました。

加えて個人的には、太田浩司、小山正文、眞真理子、真田忠勝、辻 清、東野文恵、中島誠一、中村壽夫、宮川弘久、松田博之、三輪好典、宮川孝昭、森 望、柳原笑子、渡邊嘉久の各位には種々ご教示を頂きました。

なお、写真掲載には小山興誓、田中 彰、樋口康彦の諸氏の協力を得ました。

上記全てに感謝いたします。

(2020.09.19記)

表3 藤岡家関与仏壇・厨子作品略年譜

西暦	和暦	作品名称	所在地	記載内容
1680	延宝8年晩秋吉日	根本晃家仏壇 (伝・速水の旧家蔵)	長浜市新居町	延寶八庚申年／江州長濱伊部町／藤岡甚兵衛／藤原重光作之／晩秋吉日
1685	貞享2年9月17日	現・曳山博物館蔵仏壇 (旧・北川周三郎家仏壇)	長浜市元浜町 14-8	貞享十二年／丑九月十七日／願主了慶／江州長濱／藤岡甚兵衛／重光／作
1692	元禄5年	西村家仏壇	長浜市西村町	長濱和泉甚兵衛作仏壇ノ図并領収書。 此佛壇は天保十一子年極月十四日ニ焼失セリ
1698	元禄11年	押谷政一家仏壇	長浜市栄船町	藤岡重兵衛(外側) 藤岡甚兵衛(内飾)
1704	宝永元年7月	西村仁平家仏壇	長浜市新居町	きのへ甲宝永元年七月／宮殿大工／江州長濱町北伊部町／藤原ノ朝臣／藤岡重兵衛作／八十八才／嫡子四郎三郎／舎弟 傳四郎／右三名ニテ合作 イ藤原朝臣藤原甚兵衛作
1739	元文4年	現・曳山博物館蔵仏壇 (旧・下坂幸正家仏壇)	長浜市元浜町 14-8	藤岡重兵衛
1749	寛延2年8月吉日	高田氏二有	田根村黒部	長ハマ大工藤岡甚兵衛 塗師神戸町八右エ門
1754	宝暦4年7月吉日	小川政太郎家仏壇	長浜市今川町	宝暦四歳初□吉日／長ハマ伊部町／藤岡十兵衛／造之
1756	宝暦6年	丁野観音堂厨子	長浜市湖北町丁野	藤岡重兵衛
1759	宝暦9年	小川清澄家仏壇	長浜市今川町	(藤岡)
1764	明和元年	某家仏壇	長浜市川道町	長濱藤岡重兵衛安舒 造之
	宝暦龍集	某家仏壇	長浜市川道町	藤岡重兵衛安舒
1765	明和2年12月吉日	長谷部家仏壇	長浜市今川町	明和二乙酉十二月吉日／細工人長濱／藤岡重兵衛／安舒作鳥
1771	明和8年	西岡八右衛門家仏壇	長浜市曾根町	藤岡重兵衛安舒 五七歳
1773	安永2年3月吉日	矢野清八郎家仏壇	長浜市春近町	安永貳曆癸巳弥生吉祥日湖東長濱藤岡重兵衛安舒造之
1779	安永8年11月日	森望家仏壇	米原市醒ヶ井丹生	安永八歳巳亥十一月／長濱住／藤岡重兵衛作
1785	天明5年7月	辻田太一家仏壇	長浜市川道町	藤岡十兵衛造之
1786	天明6年10月吉日	森新一郎家仏壇	長浜市森町	長濱伊部町藤岡和泉作之
1786	天明6年秋	奥村清五郎家仏壇	長浜市川道町	藤岡重兵衛
1786	天明6年12月	押谷家仏壇	長浜市森町	天明六丙午年／神無月□□日／長濱伊部町／藤岡和泉作之
1789	寛政元年12月18日	広部佐喜雄家仏壇	長浜市口分田町	寛政元己酉師走十八日／江州長濱住／藤岡重右衛門作之／行年四十二有
1808	文化5年3月5日	鈴木正文家仏壇	長浜市元浜町	(藤岡和泉) 銘なし。 墨書：戊文化五／辰三月五日
1810	文化7年2月吉日	景流寺御厨子	長浜市三田町1135	文化庚七年二月吉日 長濱 藤岡重兵衛 同 木村善四郎
1814	文化11年正月吉日	川道観音千手院大宮殿	長浜市川道452	堂内の御寶頭盧像を藤岡甚兵衛利益が奉納。
1823	文政6年	中川仁右エ門家仏壇	長浜市川道町	長濱住 藤岡重兵衛安則作之
1823	文政6年1月吉辰日	高山兵治家仏壇	長浜市高山町	文政六歳癸未／長濱住／藤岡重兵衛安則作之／行歳三拾六才
1823	文政6年	現：永楽屋所蔵仏壇 (旧大通寺茶所御内仏)	長浜市八幡中山町	藤岡重兵衛作
1831	天保2年8月吉日	宗徳寺御内仏 (旧・富田豊次郎家仏壇)	岐阜県関ヶ原町西町 (旧・長浜市)	天保貳歳／辛卯八月吉日／長濱住／藤岡重兵衛安則作之
1838	天保9年	中村壽夫家仏壇(国重文)	長浜市八木浜町809	藤岡重兵衛安則
1863	文久3年	中澤関光家仏壇	長浜市湖北町	文久三癸亥年／坂田郡長濱住／泉甚兵衛作／子泉重兵衛／造之。
	年不詳	高原又兵衛家仏壇	長浜市新居町	(藤岡)
	年不詳	高田秀博家仏壇	長浜市南高田町	(藤岡)
	年不祥	景流寺御内仏壇	長浜市三田町1135	(藤岡和泉)
1868	明治元年	小山仁平家仏壇	長浜市元浜町	(藤岡和泉)
1918	大正7年秋日	近江ベルベット社仏壇	長浜市石田町533	大正七年／江州長濱住／藤岡和泉／作
1940	昭和15年1月9日	中居喜三郎家仏壇	長浜市元浜町	昭和十五年正月九日／和順院釈善院三回忌ニ新調／中居吉三郎／五十六才
1974	昭和49年吉日	渡邊嘉久家仏壇	長浜市三ツ矢元町	昭和四十九年吉日／藤岡和泉／第十一代／重嘉／作

本表は長年藤岡作の仏壇調査研究されている宮川弘久氏の協力を得て作成したものである。



表 4 藤岡家関与建造物等作品略年譜

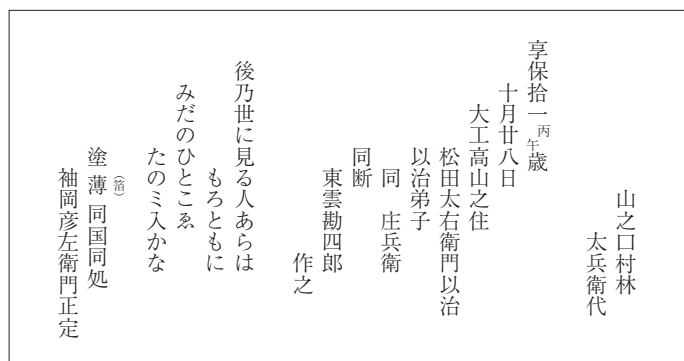
西暦	和暦	作品名称	所在地	記載内容
1694	元禄7年8月吉日	塩津神社本殿	長浜市西浅井町 塩津浜547	元禄七年きのへいぬノ八月大吉日 御宮ノ大工ほり物共ニ 江州坂田郡長濱北伊部町住藤岡甚兵衛藤原ノ光守作 同重兵衛 同五良兵衛
1694	元禄7年	五智院観音堂	長浜市曾根町789	
1699	元禄12年8月吉日	八幡宮御宮	長浜市宮前町13-15	元禄十二稔ノ卯ノ八月吉日八幡宮御宮御大工御棟梁藤原之朝臣藤岡甚兵衛光守ノ脇棟梁同弟重兵衛末光ノ同弟 五郎兵衛宗長ノ同子四郎三郎
1702	元禄15年	知善院観音堂	長浜市元浜町29-10	
1707	宝永4年4月吉日	和泉神社本殿	長浜市小谷上山田925	丁寶永四年ノ亥四月吉辰日ノ御大工藤岡和泉ノ藤原朝臣長好作ノ同嫡子四郎三郎ノ同弟勘四郎ノ同弟傳四郎ノ手傳国友住岡茂右衛門
1728	享保13年	戊亥村宮		
1753	宝暦3年	四尺社	伊香郡布施高田	
1765	明和2年	小山八幡宮本殿	長浜市西浅井町小山312	二代目 雷甚兵衛 (一富)
1780	安永9年	日吉神社本殿	敦賀市駄口字宮の脇7	銘不祥
1781	安永10年3月1日	日吉神社本殿	長浜市国友町488	前藤岡和泉因 同苗裔 和泉利盈作
1782	天明2年	和泉神社神饌所(旧拝殿)	長濱氏小谷上山田	藤岡和泉利盈
1782	天明2年	日吉神社本殿	長浜市湖北町河芸毛1271	
1782	天明2年	矢合神社本殿	長浜市中野町1427	藤岡和泉
1783	天明3年	矢合神社本殿	虎姫町中野	
1785	天明5年3月吉日	日枝神社神輿	長浜市	藤岡和泉藤原利盈
1792	寛政4年	春日神社本殿	長浜市湖北町賀463	
1796	寛政8年	郷里神社本殿	長浜市榎木町790	
1803	享和3年	天満宮本殿	長浜市口分田町718	
1804	文化元年3月	比伎多理神社本殿	長浜市湖北町今西586	大工 長浜 重兵衛
1807	文化4年	浄願寺鐘楼	長浜市相撲町654	
1811	文化8年7月	産土神社本殿 (曾根市場社殿)	長浜市曾根町718	長浜住藤岡重兵衛安則作之 同名重右衛門安道
1826	文政9年	丁野観音堂・厨子	長浜市湖北町丁野810	
1830	文政13年	長浜八幡宮唐門他	長浜市宮前町13-55	
1836	天保7年	山田神社本殿	彦根市宮田町120	
1842	天保13年3月吉日	新堂村宝作り厨子壺飴	長浜市余語町新堂	藤岡安則
1842	天保13年4月吉日	五社神社神輿	長浜市西浅井町 八田部619	棟梁 長濱住 藤岡和泉重平 /脇 甚平 ノ脇 大吉
	天保年間	新居神社本殿	長浜市新居町43	藤岡和泉
1845	弘化2年	和泉神社本殿勾欄修理	湖北町今西	藤岡和泉安則
1848	弘化5年	長浜八幡宮額	長浜市宮前町13-55	
1848	弘化5年8月吉日	和泉神社本殿高欄修理	長浜市小谷上山田町924	長濱住伊部町ノ藤岡和泉安則作ノ藤岡大吉
1867	慶応3年	西ノ宮神社本殿	長浜市木之元町飯浦	藤岡和泉
1897	明治30年5月	長光寺鐘楼 建立	高島市マキノ町寺久保	棟梁 百瀬村字澤 倉辻喜七 彫刻 藤岡和泉
1909	明治42年	新居神社神輿	長浜市新居町43	藤岡光三郎
1911	明治44年11月	徳明寺本堂 宮殿	長浜市石田町663	寄進人徳明寺總同行ノ明治参拾六年南昌吉日ノ大正四年仲冬聖曲月ノ木地作人 長濱 藤岡和泉ノ塗師 長濱町 井上裕次郎ノ金物師 京都 豊島善之助
1926	大正15年10月吉日	多景島神社本殿	彦根市多景島	(藤岡和泉)
1951	昭和26年9月12日	日吉神社神輿修理	長浜市宮司町	藤岡和泉
1959	昭和34年4月	宗徳寺須弥壇・宮殿	岐阜県関ヶ原町西町	作人 長濱 藤岡和泉
1967	昭和42年春	円龍寺本堂須弥壇・宮殿	岐阜県関ヶ原町西町2	藤岡和泉 第十一代重嘉作

表5 藤岡家関与の曳山・神輿作品略年譜

西暦	和暦	作品名称	所在地	記載内容
1676	延宝4年8月15日	長浜八幡神社神輿	長浜市宮前町13-15	延宝四丙辰年八月十五日 八幡宮氏子中敬白
1685	貞享2年	長浜八幡神社神輿	長浜市宮前町13-15	(藤岡)
1699	元禄12年	『長刀山』	長浜市小船町組	伝・藤岡重兵衛
1742	寛保2年10月29日	魚屋町曳山『鳳凰山』	長浜市魚屋町組	伊部町／大工重兵衛
1746	延享3年	『常盤山』	長浜市呉服町組	(藤岡)
1755	宝暦5年9月吉日	『青海山』 本体	長浜市北町組	大工藤岡和泉長好造之
1760	宝暦10年9月吉辰	『旭山』 本体	米原市北町	棟木：奉成就 八幡宮御山一輛 宝暦拾庚辰 九月吉震 大工藤岡重兵衛作之 神戸町
1765	明和2年9月吉日	『翁山』 本体	長浜市伊部町組	藤岡和泉藤原一富作之
1765	明和2年9月吉日	『狸々山』 本体	長浜市舟町組	藤岡和泉藤原一富
1774	安永3年9月吉日	『諫鼓山』 本体	長浜市御堂前組	藤岡和泉一富作之
1774	安永3年	『狸々丸』	長浜市舟町組	藤岡和泉一富
1782	天明2年9月吉日	『寿山』 本体	長浜市大手町組	藤岡和泉藤原利盈作之
1782	天明2年	『風々館』	長浜市宮川町	和泉利盈
1802	享和2年9月吉日	『萬歳楼』 本体・亭	長浜市瀬田町組	藤岡重兵衛安道・市松安則 俸市松安則 造之
1802	享和2年9月吉日	日枝神社の曳山風々館	長浜市宮司町	藤岡和泉藤原利盈作之
1804	文化元年	『諫鼓山』 亭	長浜市御堂前組	藤岡重兵衛安則
1805	文化2年	『青海山』 亭	長浜市北町組	藤岡重兵衛安道。
1815	文化12年	『孔雀山』 亭	長浜市神戸町組	藤岡重兵衛安則
1813	文化13年9月吉日	『高砂山』 亭	長浜市宮町組	藤岡重兵衛安則 (三十歳)
1813	文化13年	『翁山』 亭	長浜市伊部町組	十兵衛
1818	文政元年	『常盤山』 亭	長浜市呉服町組	藤岡重兵衛安則
1822	文政5年8月	『常盤山』 (素木造)	虎姫町五村 日前神社	藤岡重兵衛安道 弟子高橋仙助
1826	文政9年9月13日	旧『高砂山』 本体・亭	現・国立民俗学博物館蔵 (旧・高月町雨森村)	藤岡重兵衛安則
1829	文政12年	『鳳凰山』 本体・亭	長浜市魚屋町組	藤岡和泉一富
1842	天保13年4月吉日	五社神社神輿	長浜市西浅井町八田部619	棟梁 長濱住 藤岡和泉重平 ／脇 甚平 ／脇 大吉
1850	嘉永3年9月	『月宮殿』 亭	長浜市田町組	藤岡和泉末 藤岡重兵衛光隆
	江戸末期	『松翁山』	米原市中町	藤岡和泉
1870	明治3年9月	『紫雲閣』 亭	岐阜県垂井町中町	藤岡和泉
1871	明治4年8月吉日	『寿山』 本体・亭	米原市南町	屋根裏墨書：明治四年 米原寿山 長浜伊部 町 藤岡 (アト欠損) 張板墨書：御曳山頭領 長浜伊部 藤岡重兵衛 塗師 堀口伊之助 山蔵頭領 中西四郎 左官 高橋作造
1872	明治5年	『紫雲閣』 亭 改修	岐阜県垂井町中町	藤岡和泉
1909	明治42年	新居神社神輿	長浜市新居町43	藤岡光三郎

補記①：本稿で使用の写真の撮影者は、キャプションに紙面の関係で書ききれなかったもので、下記に記すものである。

- 写1～4 撮影：小山 興誓
- 写8 撮影：田中 彰
- 写27 撮影：樋口 康彦
- 上記以外 撮影：水野 耕嗣



補記②：図3 戸板裏面墨書翻刻